

地域生活を支える
社会福祉法人
第265回

社会福祉法人 華頂会〔滋賀県大津市〕の試み



複雑化する福祉課題に対応
医療・福祉が緊密に連携し、医療から
介護・リハビリまで切れ目のないケアを提供

同一敷地内に病院、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設が集結。病気の治療から回復期のリハビリ、ターミナルケアや看取りまで、長年の信頼関係で結ばれた職員が、ご利用者一人ひとりに寄り添い一貫したケアを実現。福祉専門学校を運営し、実践的に活躍できる人材の育成も行っている。

華頂会

法人名
社会福祉法人 華頂会

本部住所
滋賀県大津市大萱 7-7-1

URL
<https://fukuju-sou.com/>

理事長
加藤 英材

事業内容

- 特別養護老人ホーム 福寿荘
- 短期入所生活介護
- 通所介護
- 訪問介護
- 華頂社会福祉専門学校
- グループホーム 3事業所
- 地域包括支援センター



グループ全体で治療から介護、退院後の療養まで、地域に根ざした一貫したサービスを提供。将来の看護・介護を支える人材育成にも力を注いでいる。

昭和46年に開設された特別養護老人ホーム「福寿荘」。ICT機器の積極導入やノーリフティングケアに取り組み、地域から「選ばれる施設」をめざして進化を続けている。

社会福祉法人
華頂会の沿革

昭和後期、医療法人華頂会は琵琶湖養育院病院を経営し、地域住民の健康を支えていた。同じころ、民生委員の調査により、自宅で寝たきりとなっている高齢者の存在が浮き彫りになった。こうした状況を受け、創設者の加藤 守彦氏を中心とする有志が集まり、社会福祉法人華頂会を設立。昭和46年に特別養護老人ホーム「福寿荘」を開設した。当初は地元の主婦らが寮母の仕事を担当していたという。

時代に先駆けて在宅高齢者の福祉にも目を向け、昭和56年には入浴、給食、リハビリテーションのサービスを開始。基幹となる福寿荘の定員を少しずつ拡大しながら、昭和60年からはデイサービス事業をスタートさせた。

平成3年には医療法人華頂会が介護老人保健施設を開設し、病

院・特養・老健を同一敷地内に集約。これにより、医療、介護、リハビリテーションがシームレスにつながる支援体制が構築された。平成6年には介護福祉士養成施設「華頂社会福祉専門学校」を開校。現在でも滋賀県唯一の介護福祉士養成校であり、県内の福祉人材確保に大きく貢献している。

社会福祉法人華頂会の理念と方針

【理念】

〈法人理念〉

高齢者に対する社会福祉事業を包括的に展開する社会福祉法人華頂会は、地域の人々に安心して快適な暮らしを多角的に支援します。

〈基本方針〉

①利用者の人権を尊重します。
利用者の人権を擁護し、絶えず利用者の求めを適確に判断して、利用者中心のサービス提供に努めます。

②地域の高齢者福祉の拠点としての施設を目指します。

地域の人々から愛され、地域と共に発展する福祉拠点として、グループ全体で地域福祉を推進していきます。

③人材育成を行います。
社会福祉専門学校での専門職を目指す方々への教育のみならず、グループ内で働く職員全てが利用者の皆様に満足していただけるサービスを常に提供できるよう、日々研鑽を重ねます。

④法令を遵守する施設づくりを目指します。

社会福祉法人は公共の利益を目的とした法人です。私たちは法を正しく守り、情報公開や説明責任を果たします。

⑤健全な組織づくりを目指します。
充実したサービスを継続的に提供するために、健全な組織運営並びに安定した法人経営に努めます。

華頂会
の試み

Case 1

ご利用者一人ひとりの 人生に寄り添う、 医療と福祉の緊密な連携体制



医療と福祉の垣根を越え、ご利用者一人ひとりに寄り添った支援を展開。定期的な会議で各事業所の課題や情報を共有し、グループ内の連携を深めている。

緑豊かな琵琶湖畔に位置する大津市瀬田地域。落ち着いた住環境が子育て世代に好評である一方、旧来の集落エリアでは独居高齢者が多く二極化が進んでいる。JR瀬田駅を中心に便利な公共交通網が整備されているものの、車への依存度が高い地域も存在する。“若返りと高齢化の同時進行”が地域の大きな特徴であり、華頂会でも福祉課題の複雑化を肌で感じてきた。

医療法人をルーツに、病院・特別養護老人ホーム・介護老人保健施設が同一敷地内に隣接する。さらに徒歩圏内に福祉専門学校を設立して、人材育成も担い地域に貢献してきた。当初は異なる分野の間での情報共有や役割分担に苦労した面もあったというが、現在は互いの専門性を尊重しながら協働する体制が確立されている。

在宅サービスを利用していた方が入院し、退院後に老健で集中的なリハビリを行ったものの、在宅復帰が難しい場合でも、同じ敷地

内に特養があることで、環境の変化を最小限に抑えながら、スムーズに生活の場を移行できる。各建物は渡り廊下でつながっているため、施設を移っても旧知の職員と顔を合わせる機会が多く、ご利用者の安心感につながっている。

カンファレンスは医師・看護師・介護職・リハビリ職などの多職種で行われる。入院前後の情報共有も迅速で、ベッドコントロールのしやすさにもつながっている。理学療法士や作業療法士など、リハビリ専門職の知見をダイレクトに現場へ共有できる点も強みだ。



福祉専門学校の学生は、実習のみならず施設のイベントにも積極的に参加し、ご利用者や職員との交流を重ねている。クリスマス会では歌の披露や手作りプレゼントの進呈など、心温まるひとときを共有した。

特別養護老人ホーム福寿荘では、併設病院の医師によるオンコール対応を行っている。休日や夜間でもご利用者の急変を当直の医師へ伝えることができ、必要な場合はそのまま看取りも行う。早めに医師へ相談できる体制を整えることで、夜間の急変防止や迅速な対応につながっている。

また、複合施設だからこそ、入院・退院・在宅復帰・看取りまで一人の方の人生に長く伴走できる。この環境は職員にとっても大きなやりがいとなっている。

華頂会
の試み

Case 2

顔の見える関係が育む信頼。 緊急時にも頼れる 地域包括支援センター



窓口では、心身の状態や生活状況をていねいにヒアリング。医師やケアマネジャー、民生委員など多職種・関係機関と連携し、一人ひとりに最適な支援へとつなげている。

長年にわたって地域の高齢者福祉の拠点となってきた華頂会では、大津市からの委託を受けて包括支援センター「瀬田第二あんしん長寿相談所」を設置している。主任介護支援専門員、社会福祉士、看護師が連携し、地域の方がたからの相談に日々耳を傾けている。何かあれば“相談できる人がいる”という安心感は、地域全体の福祉力を底上げすることにもつながっている。

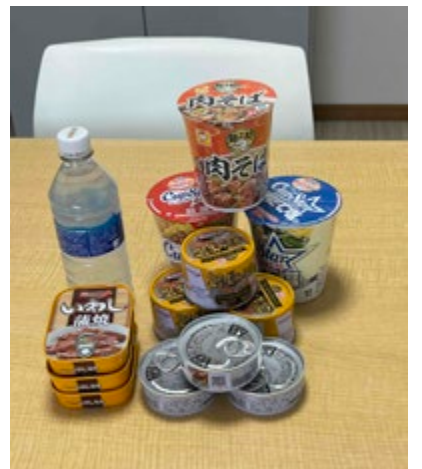
介護保険に関する内容など月平均230件前後の相談が寄せられるなか、地域の課題を早期に把握すると同時に、介護予防講座や健康づくり活動にも積極的に取り組む。予防段階から支援することで、生活の質の維持・向上をめざしている。老人会などの依頼を受け、認知症講座やフレイル予防講座を開催するほか、オーダーメイドの研修にも対応する。過去に落語の心得がある保健師が健康講座を開いた際には、会場が大きな笑いに包まれ、参加者から大好評を

博した。

一方で、近年深刻化しているのが福祉課題の複雑化である。「独居」に加え、「認知症」「身寄りがいない」といった複数の問題を抱えるケースが増加している。強引な介入は拒否感を高め、支援の糸口を閉ざしかねないため、短時間の訪問を重ねるなど根気強くアプローチしている。時には、インターホン越しでしか会話が成り立たないケースで併設病院と連携することもある。受診の際に連絡をもらい、院内で顔を合わせたことをきっかけに、対面でのやりとりが可能になるケースもある。こうした連携を維持するため、オンラインで完結できる会議や研修であっても、可能な限り現地に足を運び、日頃から「顔の見える関係づくり」を大切にしている。

さらに法人独自の取組として、生活困窮者への緊急支援物資も備えている。社会福祉協議会にも同様の取組はあるが、窓口が閉まる土日祝日には対応できないという

課題があった。そこで華頂会では飲料水や缶詰などの物資を備蓄し、必要時に即時対応できる体制を整えた。実際に、DV被害を受けて避難してきた方に対し、行政へつなぐまでの間、華頂会の物資を提供して生活を支えた事例もある。多機関連携を図りながら、制度の狭間にある課題には法人独自で解決に取り組む。地域における強固なセーフティネットとしての役割を果たしている。



華頂会が独自に備蓄している緊急支援物資。飲料水をはじめ、カップ麺や缶詰など調理器具不要ですぐに口にできる食品を常備している。

華頂会
の試み

Case 3

県内唯一の介護福祉士養成校 時代のニーズに応え 外国人材の育成に注力



華頂社会福祉専門学校では、介護福祉科、社会福祉科、実務者研修科の3学科を開設。学業から日常生活の悩みまで気軽に相談できる環境を整えている。

華頂会では、滋賀県唯一の介護福祉士養成校「華頂社会福祉専門学校」を運営している。全国的な傾向と同様に、学生の9割を外国人が占め、なかでもネパールからの留学生が多い。設立当初から「全人教育」「感性教育」「実践教育」を教育方針に掲げ、質の高い人材育成に取り組んでいる。

留学生支援では、医療と福祉が一体となった法人の強みが存分に生かされている。日常生活で体調を崩した際には併設の琵琶湖養育院病院で相談や診察を受けることができる。また、生活相談や住宅支援、ビザ関連のサポートといった個別支援にも注力。日本語の習熟度に合わせた学習指導や国家試験対策も手厚く行う。定員40名の少人数制をとることで、学生一人ひとりに寄り添ったいい教育を実現している。

さらに法人内の特養、老健、グループホームの協力を得ながら、実践的な実習を柔軟に行える点も大きな強みだ。

こうした学生たちの存在は、法人全体に新しい風と活気をもたらしている。学生が施設を訪れて歌や踊りを披露したり、関連の看護専門学校の学校祭に参加したりと、交流を深める場面も多い。卒業後は華頂会へ就職するだけでなく、他法人へ羽ばたく人材もいる。学校の手厚いサポート体制に信頼を寄せ、母国から家族を呼び寄せて定住を決意するケースも出てきた。

留学生の受入れ初期は、教材の漢字にルビを振ったり、理解度に応じて個別指導を行ったりと、試行錯誤の連続だったという。こうして試行錯誤を重ねながら留学生を育て上げてきた実績に対し、他機関からの期待も厚い。現在は県からの委託を受け、「外国人初任者研修」なども実施している。授業には法人内各施設の職員が講師として登壇する。

卒業生が県内各地で活躍するようになったことで、実習受け入れなどの協力体制も一段と強固に

なった。介護現場で働きながら、法人の外国人講座のサポートスタッフを務める元留学生も存在する。かつての教え子が実習指導者や講師として後輩を指導する姿を見ることは、教職員や現場職員にとって何よりの喜びとなっている。



教育方針の柱である「実践教育」。幅広いニーズに対応できる力を養うため、介護実習や多彩な体験活動、実習報告会などを通じて即戦力となる実践力を育んでいる。

華頂会
の試み

Case 4

ICTで現場を改革 “経験と勘”から“根拠と分析” に基づく介護へ



2025年12月、「しがけあフェスタ」における「抱え上げない介護推進事業所推奨交付式」の様子。安心・安全な「抱え上げない介護」の定着に向け、取組を継続している。

福寿荘では他施設との差別化を図り、「選ばれる施設」となることをめざして、6年前からICT機器の導入やノーリフティングケアへの取組をスタートした。

導入当初、現場には“これまでのやり方”への信頼が根強く、「操作を覚える負担が大きい」「機械よりも自分の目で確認したほうが確実ではないか」といった困惑の声もあった。しかし、写真付きマニュアルを作成するなど準備を徹底。機器に慣れた若手職員が率先して活用し、目に見える効果が現れ始めたことで、現場の理解と協力も一気に進んだ。

ご利用者の睡眠状態・呼吸・離床をリアルタイムでモニタリングし、インカムへ通知する見守りセンサーは、携帯端末で室内映像を確認できる。これにより、いわゆる“空振り巡回”でご利用者の眠りを妨げる機会が減少。生活リズムが整い、日中のQOL向上につながっている。

抱え上げない「ノーリフティン

グケア」では、スライディングシートやリフトを活用。乗降時の痛み軽減、皮膚トラブルの減少、体位交換の安定など、ご利用者の快適性が飛躍的に向上した。同時に職員の腰痛予防にもつながり、安全な職場環境への意識が定着している。

ICTの導入は、介護のあり方を“経験と勘”から“根拠と分析”へと劇的に進化させた。この先進的な事例は滋賀県内でも注目を集め、行政の広報紙に取り上げられるほどだ。今後は蓄積されたデータを活用し、科学的根拠に基づいたケアプランへの反映や、ICTと介護記録のさらなる連動強化を進めていく考えだ。

「経済的困窮や家族関係の断絶など、福祉ニーズの複雑化を感じています。一つの事業所だけでは対応しきれない課題が増加しているからこそ、当法人のように医療法人と社会福祉法人が一体となっている強みが生きると考えています。法人規模を活かした多機関連

携を推進し、ご利用者が心から安心して過ごせ、職員もやりがいを持って働き続けられる環境をつくっていききたいです」（早瀬 司施設長）。



メーカー担当者を講師に招き、体圧センサーを用いた実技研修を実施。最新技術と知識を取り入れ、サービスの質向上につなげている。



手動タイプのスタンディングリフトを導入。ご利用者の「立つ力」を最大限に引き出し、立位能力の維持と自立排泄の継続を支援している。